

ニホンジカによる被害の現状と課題について

南信森林管理署 造林係 ○ 福島 純
伊那里森林官 日戸 恒良
伊那里森林事務所 寺島 史郎

要旨

近年、下伊那・上伊那地域に於けるニホンジカによる農林被害の拡大が深刻な問題となっています。当署管内の国有林においても、立木の樹皮剥皮による被害及び下層植生等の食害が顕著になっています。当署における被害は、ここ数年来ですが、その被害は年々拡大しており、森林の維持、林地保全等の面からも対策が必要となっています。今後、早急なニホンジカの保護と被害防除対策の樹立に向けた取り組みが必要と考えています。

はじめに

最近、上伊那、下伊那地域におけるニホンジカによる農林業被害の拡大が深刻な問題となり、南信森林管理署管内の国有林においても、立木の剥皮による被害や下層植生等の食害が顕著になってきています（写真－1、2）。

その被害の現状と今後の課題について発表します。



写真－1 立木剥皮被害状況



写真－2 立木剥皮被害状況

1 概要

南信森林管理署が管轄する国有林20,655haの大部分は、大竜川の支流である三峰川の源流部に所在し、南アルプスの山麓に位置しています（図－1）。

また、標高は沢山のふもと1,000mから塩見岳の3,047mに位置しています。

2 発生時期

当署においてニホンジカ被害の発生が顕著に見られるようになってきたのはここ数年来ですが、立木の剥皮による枯損、稚樹、幼樹等の食害などその被害は年々拡大している状況にあります。

そこで、いつ頃から被害が発生したかを調査しました。西風巻広葉樹天然更新指標林では、稚樹の発生、生育状況を定期的に調査しています。

その生育本数の推移を整理しました（図－2）。1983年に設定後、1994年から1999年にかけて稚樹の本数が急激に減少しています。このことから、1994年頃からニホンジカによる被害が発生し、今日にいたっていると考えます。

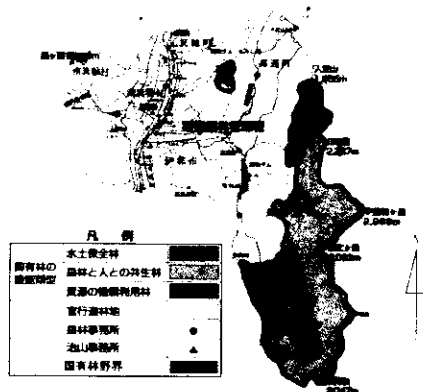


図-1 国有林位置図

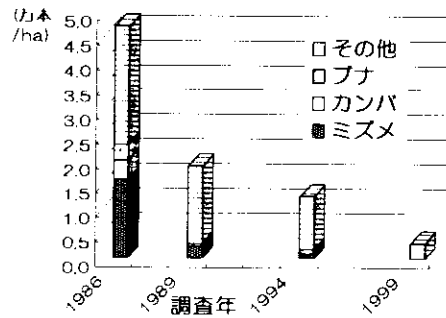


図-2 植生の推移

3 被害の現状

ニホンジカによる樹皮の剥皮が原因で立木や灌木の枯損、クマザサ等の枯損が顕著になったことから、1998年度から本年度にかけて被害の状況を浦内国有林、黒河内国有林を主体に踏査しました。まず、管内の流域ごとに、ニホンジカによる被害状況について紹介します。

(1) 菰立流域の被害状況

菰立流域は三峰川の支流に位置しています(図-3)。下層植生のササが立枯れしており、シラカンバの中にあるカラマツの樹皮が剥皮され、カンバの小径木も剥皮されています。カラマツの大径木も角とぎによって無惨に剥皮されています(写真-3)。

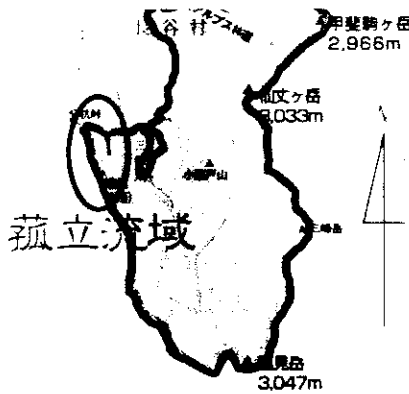


図-3 菰立流域図



写真-3 菰立流域

(2) 三峰川流域の被害状況 :

三峰川流域は小瀬戸山、三峰岳、塩見岳を源流に持ち、急峻な地形をかたちづくっています。

ア 下流域の被害状況 (図-4)

この周辺は被害が著しく根際から140cm付近まで剥皮されています(写真-4)。林内を見ると至る所に剥皮された灌木があります(写真-5)。サワグルミの樹皮も剥皮され、倒木の樹皮まで剥皮した後が見受けられました(写真-6)。

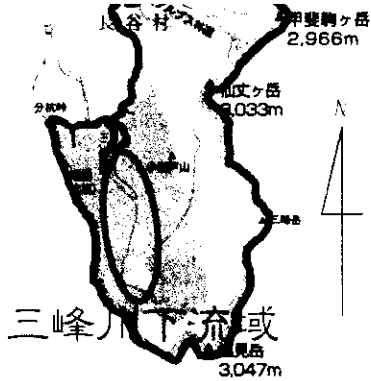


図-4 三峰川下流域図



写真-4 三峰川(下流)流域



写真-5 三峰川(下流)流域



写真-6 三峰川(下流)流域

イ 上流域の被害状況 (図-5)

上流域は急峻になり、カモシカとの混在が考えられますが、灌木やシラベの小径木が剥皮被害にあっています(写真-7)。

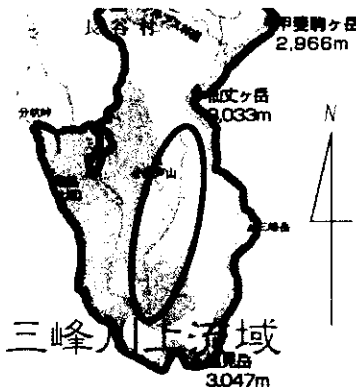


図-5 三峰川上流域図



写真-7 三峰川(上流)流域

(3) 尾勝谷流域の被害状況

尾勝谷は南アルプス林道の南に位置しています(図-6)。この近辺も下層植生のササが枯死し、ミズキが胸高部まで剥皮されています(写真-8右)。奥に見えるカラマツの大径木が剥皮されています(同左)。

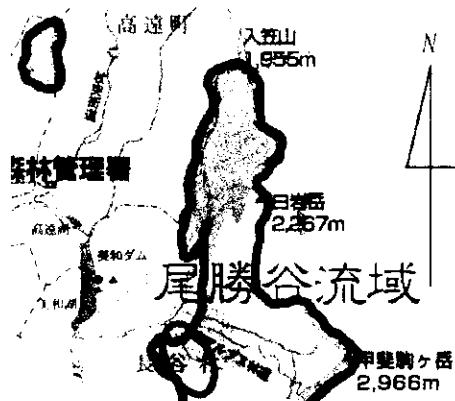


図-6 尾勝谷流域図



写真-8 尾勝谷流域

(4) 小黒川流域の被害状況

小黒川流域は入笠山を源流に持ち、沢が入り組んだ地形をしています(図-7)。この流域はあまり目立った被害が見受けられませんが、林内にはシカ道ができ、角とぎの後も見受けられました(写真-9)。

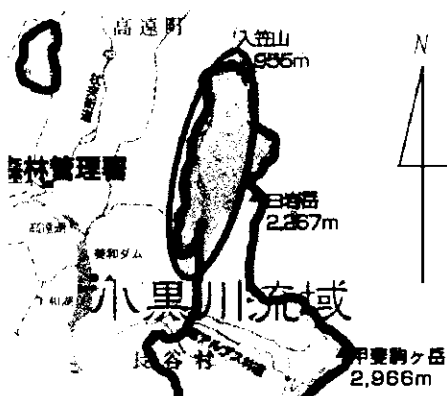


図-7 小黒川流域図



写真-9 小黒川流域

流域の上流に位置する大阿原湿原には鹿道と思われる道がいく筋もついています。湿原を上空から撮ったものです(写真-10)。そのままでは観づらいのでその道筋をなぞってみました(写真-11)。道は森と、湿原の浮き島を結ぶように至る所にのびているのが分かります。

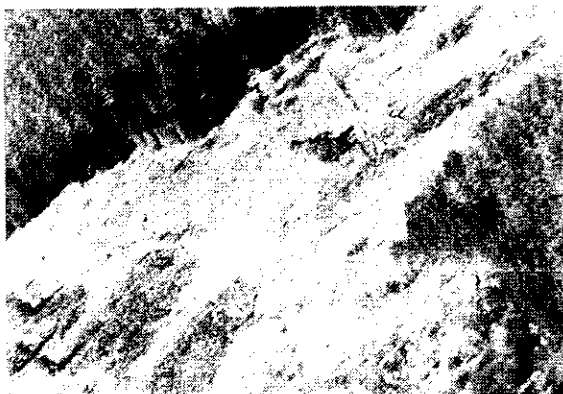


写真-10 大阿原湿原のシカ進入経路



写真-11 大阿原湿原のシカ進入経路

4 樹皮の剥皮の時期

被害の発生する時期は落葉期よりも降雪期、融雪期、草本成長期に見られ、最も顕著に見られるのは、融雪期の3月から5月、ついで、降雪期の12月頃です(図-8)。

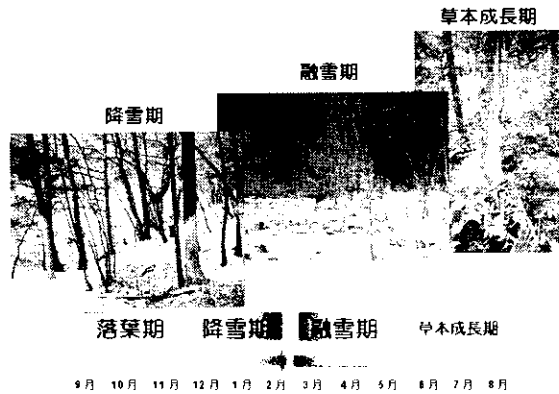


図-8 被害の時期

5 被害の背景

また、資料を取りまとめる中での鳥獣保護区の設定が大きく変わったことに着眼しました。太枠はシカ捕獲禁止区域として、大鹿村周辺に1922年から1993年までの71年間、設定されていました(図-9)。

1994年からはその枠が外され狩猟区となり、現在にいたっています(図-10)。しかし、山の北側は現在も保護区に指定されており、有害鳥獣駆除以外の捕獲は認められていません。このことからシカは71年間のびのびと繁殖し、管内ではいまだに繁殖し続けていることが分かります。そして、狩猟により、尾根をこえて管内にさらに侵入してきたことが考えられます。

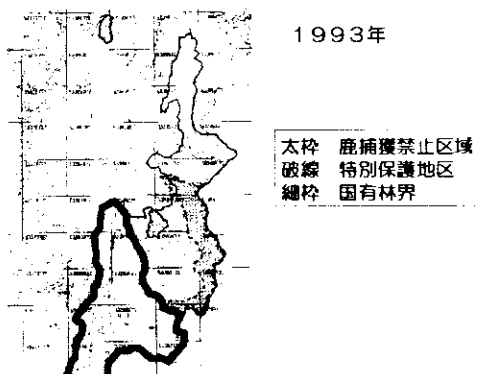


図-9 長野県鳥獣保護区の変遷

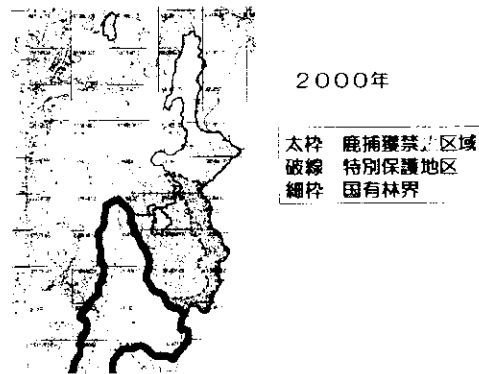


図-10 長野県鳥獣保護区の変遷

6 ニホンジカ、カモシカの目撃地点

図-11は、1998年と1999年に日常業務を行うなかで、職員、請負事業者等の事業者がニホンジカ、カモシカを目撃した地点を管内図に整理したものです(図-11)。目撃した地点を1キロメッシュで表示しました。○印はニホンジカの、×印はカモシカを目撃地点をあらわし、黒色は双方を目撃した地点をあらわしています。ニホンジカを目撃した地点は、林道周辺に集中していますが、管内全般に目撃しており、標高1900メートル付近でも目撃しています。管内では、年間を通じてニホンジカを目撃していますが、特に交尾期の9月から12月は十数頭の群れを目撃しています。カモシカを目撃する地点は標高が高く、生息域が狭められているのではないかと考えています。

す。

また、ニホンジカによる被害は樹皮の剥皮の状況、下層植生の有無等から矢印の方向に、南から北に拡大していると考えています。



図-1-1 ニホンジカ・カモシカの目撃地点

7 今後の課題

ニホンジカによる農林産物への被害が顕著になるなかで、民有林においては有害鳥獣駆除が進められています。しかし、これまで以上に森林への被害が拡大すると、森林の維持造成や、林地の保全の上からも危惧される状況となっています。今後、ニホンジカの保護と被害対策に向けた課題をあげると下記の2点に集約することができると思います。

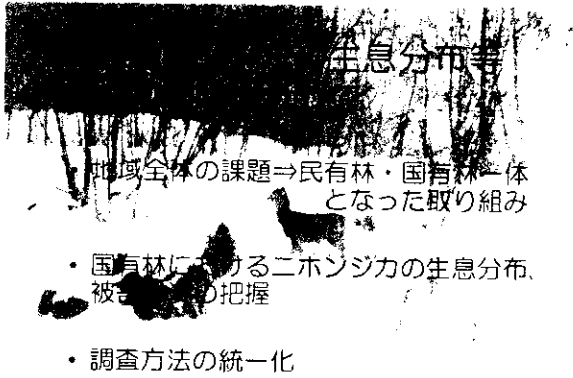
- ・ニホンジカの生息分布等の把握について、
- ・保育等の森林施業について、

(1) 一つ目の課題は、伊那谷地域の南アルプス山麓に被害が拡大している状況であり、地域全体の課題として、民有林、国有林一体となった取り組みが必要です。

また、国有林におけるニホンジカの生息分布、被害状況を把握する必要があります。なお、ニホンジカの生息分布、被害状況を把握するにあたり、民有林、国有林とも同様な考え方で調査を行う必要があります。

(2) 二つ目の課題は、ニホンジカによる森林被害対策として、シカ柵の設置、ツリーガードの設置等が考えられていますが、抜本的な解決策とはいえない状況です。対策として、森林施業のあり方の検討が必要と考えています。当署としては保護管理計画が作成されるまでの当分の間は、幼齢林を主体にシカ柵の設置、ツリーガードの設置を行いながら、目的樹種や有用広葉樹を保全するような施業を行い、成林後は被害当の林分状況に応じ、除伐等を見合わせて、つるきり主体の施業を行っていきたいと考えています。

(3) 長野県においても、ニホンジカ生息状況調査が実施されていると聞いていますが、ニホンジカの被害が拡大する中であっては、生息数の調整、生息地の保護および整備等を勘案した保護管理計画の早期樹立が必要と考えます。



2. 保育等の森林施業のあり方について

- シカ柵・ツリーガードの設置
- 目的樹種や有用広葉樹を保全する施業の確立
- 除伐等を見合わせ、つる切主体の施業へ

おわりに

森林は多様な生物を育み、水を生み出すみなもになっています。そこにはシカも、クマも、猛禽類もそして人間も含まれています。このような森林を管理する私達の使命は、森林の持つ力を十分に発揮できるように適切に維持管理することです。そして、森に生きる生物の生活を支えていくことが重要だと考えます。また、多様なフィールドを持つ国有林として研究の場、および人と森との接点を繋ぐ場としての提供を行っていきたいと思います。



豊かな森と野生動物との共生を目指して

